opusdei.org

慎みを育てる(2) 少年期と青年期

青年期は一人ひとりの人生に となる時期で基盤と同時に、他者 自由を味わうと同時にとの 自の絆を確かにすることの とです。 したがって、 うれる がき うれる があずから 違う ものです。

2014/08/28

7歳から12歳(思春期の徴候が現れる)までの間は、親にとっても子供にとっても、なかでもそれ以前の

段階できっちりと子育てをしていた場合は、もっとも楽しい発育とはいる。子供はもう自分のことが、おりになっても親に打らないで頼を頼的いる。とれが適切な言葉を使えされば、教えられることをよく理解するようになる。

楽しい時期

慎みを教えることにおいても同じで ある。この時期は、子供たちに慎み がどういうところに現れるかを教え るだけでなく、なんのために慎みを 牛きるのがよいのかを説明するのに とっておきの時期である。例えば、 衣服は単に体を包み隠すだけではな く自分を表現するものであること、 つまりどのように自分を他人に知っ てもらいたいかを示すこと、そして だらしない格好を避けることは他人 を尊重することで、同時に自分に敬 意を払うように求めることになるの だということも理解できるだろう。

同時にプライバシーを上手に管理すること、つまりプライバシーは誰にでも露わにするのでも、いつも隠すものでもなく、適切な仕方で適切な人にだけ、伝えるべきであることも教えねばならない。ここで大切になる徳が賢慮であるが、この徳は、よ

く生きようという正しい心構えと経 験とよい助言によって得られ、それ がこの徳を身につけて行くにあたちに で両親の役割は大きい。子供で 大人になる道の最階でで 表みができるために必要な心 がら、何を、 等 り返しながら、何を、 を 、なぜ信頼するべきなのかを で いくである。

しなさい。私はコウノトリというコ ウノトリを処分しました。神様があ なたたちを使って彼らに生命を与え られたこと、彼らはあなたたちの愛 と献身と犠牲の実りであることを教 えなさい。それが上手にできるため には子供たちのよい友達になって、 彼らが何でも信頼して話せるような 関係を作っておかねばなりませんし (聖ホセマリア、1972年10月31日の 話)。このような親しい会話ができ れば、その中で人間の体が価値ある ものであること、体は丁寧に扱わね ばならないこと、体を快楽や遊びの 道具と考えてはいけないことを教え

その他に、思春期に起こる肉体的精神的変化を事前に説明しておくことも大切である。そうすれば、事が起こったとき子供はそれを普通のこととして受け入れることができる。

ることができる。

「この問題に関して悪意ある人々の 影響から子供を守る必要がある。そ

うしないと、それ自身は尊く聖なる ものであることを、友達や知り合い の下品な説明から知るということに なる | (聖ホセマリア、『対談』 100)。ここでも否定的な見方に支 配されてはいけない。性に関する情 報が氾濫している現実を無視するこ となく、またそれでなくても子供は 小さいときからこういったことを知 るのが普通であるが、大切なことは 子供におけるこういった変化を体と 心の成長の一段階と捉えることであ る。もし健全な生き方をしようと努 め、悪い刺激に対して素早く抵抗し ようするなら、慎みは心の清さを守 るための効果的な助けとなるだろ う。

困難な時期(思春期)

本稿のテーマに関しては、思春期の 初めと思春期そのものは親にとって 最もやっかいな時期である。まず子 供たちは自分のプライバシーを守る

のにより神経質になる。時には、反 抗的な態度をとり、ただ単に反対し たいから反対するというようなこと もある。この態度の裏には、自分は もう子供ではないので、一人前の大 人として扱って欲しいという望みが ある。この態度の変化は親を当惑さ せることもある。もう子供たちはプ ライバシーの一部を自分たちではな く友達に打ち明けているという現実 にうすうす気づく。そのほかにも、 子供の気移りの激しさにも当惑させ られる。あるときは、誰に対しても かたくなに心を閉ざすかと思えば、 別の時には不釣り合いなほど自分に 構って欲しいと要求することがあ る。この最後の状況は見過ごさない ように注意する価値がある。彼らの 言うことにできるかぎり親身になっ て耳を傾けることである。というの は、次にそのように求めてくるのが いつになるかわからないからだ。

この独立したいという望みと自分だ けの世界に籠もりたいという望みを もつ時期は、大人になるために必要 なだけでなく、人格の成長を促すた めの新しい機会でもある。青年は自 分の内面の世界を深める必要があ り、状況によってあるときはそれを 見せ、あるときはそれを隠すことを 学ばねばならない。この点に関して 親が子供に提供できる助けは、大部 分の場合、彼らの信頼を勝ち取るこ とと、待つことを学ぶことにある。 彼らのことに関心をもち、彼らのた めには何でもするという態度を保つ こと、子供たちが親を探すときや状 況が子供との話を要求するときを 待っているという態度を保つことで ある。

信頼とは勝ち取るもので、強制する ものではない。ましてや、子供を監 視したり、その手帳や日記を盗み読 みしたり、友達と何を話したのかと 尋ねたり、あるいはソーシャルネッ トワークで別の人物になりすまして 彼らとつきあったりして、埋め合わ せできるようなものではない。子供 が、親のそのような行動は自分のた めだと考えたとしても、そういう手 段は互いの信頼関係をつぶす最悪の 方法であり、普通の状況の中では正 義に反するやり方である。

青年は自分について大きな関心をも つ。それはあらゆる面においてであ るが、なかでも肉体についての関心 が強い。そのため、彼らがまず心を 配るべき慎みとは自分自身に関する 慎みである。このことは男女どちら にも当てはまるが、その表れは男と 女によって多少の違いがある。女の 子においては、皆があこがれるモデ ルと自分を比較し、異性の目に魅力 的であることに気を配る傾向が強 い。男の子においては、女の子から もよく見られたいという望みもある が、どちらかというと男友達から かっこよく強い肉体を持っていると

見られたいという望みが強い。青年期のこの自己陶酔は大部分自分部と観察するが、よく観察するが、よりで実行されるが、よりで変更のでは、見のでは、の態度の徴候を見つけるでは、のりない。例えば、ときついるというでは、ないのではないの子では、、自分をいるとなどがそうである。

こと、悪い好奇心を避けること) が、自分が望んでいる寛大な心を持 つために必要な要件であると考える ようになるだろう。

慎みとファッション

このほかに思春期は隣人に対する慎 みを生きる仕方、特に他の人とどの ようにつきあうか、どのような会話 をするか、どのような服装をするか を学ぶ新しい機会でもある。いろい ろな要因があろうが、また場所に よって度合いは異なるが、現代社会 の雰囲気は退廃的で、かつその影響 をきわめてアグレッシブに社会習慣 に押しつけてくる。しかし、見間違 えてはいけないことは、大部分の場 合、だらしない振る舞い方のいくら かは、子供たちが望んでしているの ではないということだ。青年たち は、いくら個人的な自立を要求して も、実際は個性のない群衆根性から 抜け切れていない。友達と違ってい

ると何か落ち着かないのだ。男の子がだらしない格好をするときそれを特別に好きだからしているのでははない、あるいは女の子が慎みに欠けたいあるとき、そうしたいからしているのではない、彼らがそうするのは、ただ友達からのけ者にされるのが怖いからなのだ。

それに対する対策は、子供を友達グ ループから引き離すことではない。 成長するためには友達も欠くことの できない要素なのだ。必要なのは、 周囲に流されずに生きることを教え ることだ。そして、どのようにして それができるかを学ぶことである。 もし子供が「だってみんなこうする んだもの」と言うなら、親はまず自 分の個性を大切にすることの重要性 を説明し、よい友人を持つように助 けるべきである。その次に、親自身 が子供の友達の親と友達になるよう に努める。それができれば、色んな

問題について意見を同じくすること が可能になる。

いずれにしても、譲歩してはいけな い。ふしだらな服装や最低限のよい 感じにさえ反する服装はどんなもの でも、家庭内に入れてはならない。 両親はそのことを見過ごすべきでは なく、時が来たら子供たちにやさし く、しかしはっきりと話さねばなら ない。聖ホセマリアは子を持つ親に こう言っている。「もしあなたたち がしっかりした考えを持たず、『他 の家でもしているよ』と言われて、 『自分の家の中ではそれはだめ』と 言えないなら、残念なことです。あ なたは子供たちに上手に話すことが できると思います。彼らの耳元で、 もし家でそんなことを許すならその うちどうなるか、説明してやりなさ い。きっとあなたの言うことを聞く でしょう| (1974年7月25日の団ら ん)。子供たちが腹を立てている間 は黙っていて、気持ちが落ち着くの

を待って、なぜそうするのかの理由 を説明することが大切である。幼年 期にはこれらのテーマについて説明 するのは子供と同性の親がふさわし いが、青少年期ではしばしばもう一 方が関わるのがよい場合がある。例 えば、なぜ露出が過ぎる服を着るの はよくないのかを理解しない女の子 に対して、父親が話してその理解で きない部分を説明するのがよい。つ まりそんな格好をすれば、確かに男 の子の視線を引くことができるが彼 らの尊敬を受けることはできない کے

他の問題と同じく、親は自分たちが 若かったときに経験したり学んだり したことを、言葉を慎重に選びなが ら子供に話すのはよいことだ。結婚 しようと考えた相手に何を望んでも しようと考えた相手に何を望んで初 は何の効果もないかのように見える が、後に理解できるときが来ると彼 らは親に感謝するようになるだろ う。

慎みの教育において、両親は、でき る範囲の中で、子供たちの生活圏の 周辺にも気を配るべきである。ま ず、休暇の場所の選択ということが ある。多くの国々で夏の海辺で休暇 を過ごすのは賢い選択ではない。子 供に見せるのがはばかられるような 情景を避けるために手段を講じたと しても、夏の海辺の雰囲気は非常に 堕落しており、品位ある生活を送る ことが難しい。これと同じように、 子供が何かの組織の主催するキャン プや他の活動に参加する場合、その リーダーたちが健全な雰囲気を保つ ためにどのような手段を講じるかを 前もって知るべきである。

もう一つの分野は子供たちの遊びの場所である。というのは青少年にとって友達グループから受ける圧力は尋常ではないからである。子供た

ちが遊ぶ場所の雰囲気がどんなもの であるかを知り、もして別のであるいを知り、合って別のことの可能と話し合って別のはといることはいうに努めることはより身近なものをあるが、三世が自分のは当然であるが、子りたと思うのは当然い。品位にない。 自由も無制限ではない。 自由も無制限ではない。 自由もを部屋に飾ることはよくない。

も、落ち着きを失ってはいけない。 親も、自分がその年代の少年であっ たとき、同じ経験をしたことを思い 出すべきだろう。教育の作業にはい つも並々ならぬ忍耐が必要である が、特にこの慎みの徳のような、子 供たちに伝えたい基準が最初は彼ら の基準とはかけ離れているように思 えるような分野においてはなおさら である。やがて彼らがこのことを理 解し、自分のものとする時がくるだ ろうが、そのためには、愛情とユー モアと信頼をもって、本当に子供の ためになると確信している親が何度 も繰り返して教える必要がある。

pdf | から自動的に生成されるドキュメント <u>https://opusdei.org/ja-jp/article/tsutsushimi2/</u> (2025/12/15)